

唐津の湊

鮎 川 和 樹

2023年 3 月

『西海考古』 第13号 抜刷

唐津の湊

鮎川 和樹

はじめに

佐賀県北西部に位置する唐津地域は、古来よりその地理的環境から中国大陸（以下、大陸とする）、朝鮮半島（以下、半島とする）に近く、対外交流の窓口として歴史を紡いできた。この窓口の舞台となったのが陸上と水上をつなぐ役割を果たす「湊」である（註1）。

湊についての歴史的研究は、かつて存在した湊の姿を復元することで、湊がその地域で果たした役割や機能を研究することがひとつの分野となっている。これは全国的にみて湊の多くが自然埋没や地震などによる地形の変化や近世に行われた干拓工事、近代に行われた大規模な埋め立て工事による港湾整備などによって往時の姿を留めていないことが多いためである。よって湊の歴史的研究は、これまで文献史学・歴史地理学・考古学などの分野から様々な研究成果を組み合わせることで湊の景観復元が試みられてきた。

近年、考古学的な湊の研究結果としてまとめられたものとして令和4年3月に文化庁が刊行した『水中遺跡ハンドブック』がある。この本はこれまで主に埋蔵文化財行政が発掘調査の対象としてきた陸上の遺跡だけではなく、「水中遺跡」を定義づけ、水中遺跡の調査方法や保護の現状を解説している。この水中遺跡とは「海域や湖沼等において、常時もしくは満潮時に水面下にある遺跡」と定義し、このうち渇水期や出水期に出現する「水位変動域の遺跡」と常に水没している「常時水面下の遺跡」に大別されるとする（文化庁文化財第二課 2022）。その具体的な様子は「水中遺跡関連図」（図1）として示されており、水域に接して様々な遺跡が残されていることが分かる。湊および湊に関連する遺構もこの水中遺跡の中に含まれる。本稿は、かつて唐津に存在した湊の景観およびその歴史の変遷を追うことで、当該地域における湊から見た歴史のアウトラインを示すことを目的とする。

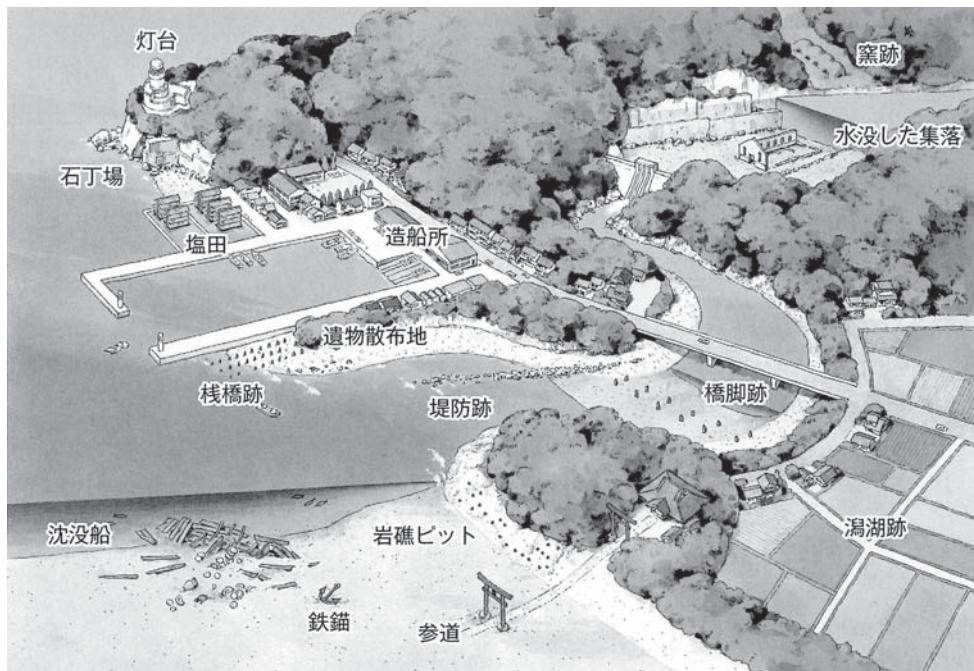


図1 水中遺跡関連図（文化庁文化財第二課編 2022より転載）

1. 湊の性格

(1) 湊の名称

「みなと」の表記は特に古代において津、濟、船瀬、泊、水門と様々な用語・漢字があてられていた。市村高男氏によると、このうち津は海上交通の湊、濟は河川の渡し場的なものを意味し、ともに令制下での呼称であったとする。船瀬は防波堤など人為的施設を伴った港湾であり、泊という言葉で置き換えられた。泊は停泊する場所という意味合いが強い言葉であるが、津とほぼ同義語で用いられることが多い。また、河口部に立地する地形条件から水門という呼称が成立した（市村 2016）。唐津にあてられた「津」とは海上交通の湊であり、停泊地としての意味合いを持つ名称であった。

(2) 湊の立地

湊の種類は、海に立地する湊と河川に立地する湊である川湊の大きく二つに分けられる。この湊ができる場所は市村氏によって次のように類型化されている。①河川の河口やラグーン(潟湖：せきこ)あるいは湾にできた湊②内海にできた湊（市村 1996）。このうち内海をもたない唐津にある湊は前者である。

湊の機能として必要なのは船舶が安全に停泊できることが最低限の条件であり、その条件を満たすため前近代における湊のできる場所は自然地形に拠るところが大きかった。特に河川の河口に発生するラグーンは、かつて日本列島沿岸部のいたるところに存在し、河川から運ばれた物資を海上輸送する際の中継地として機能するとともに外海から隔てられた天然の良港としても機能していた（文化庁文化財第二課 2022）。

このように湊ができる場所は、水産資源を獲得するための漁業や湊を介した人の移動や各地の物資が流通する水上交通・交易の場所としての機能を有していた。

(3) 湊の構成

湊を構成する要素（施設）は時代によって変化するが、波風を避けるための堤防などの施設、水流などによる陸地の浸食を防ぐ護岸施設、人や物の積み下ろしのための雁木、棧橋などの施設、船を係留するための係留杭、船を安全に停泊させるための船溜まりなどの施設がある（文化庁文化財第二課前掲）。これらの施設が土中に埋没あるいは水没することで、水中遺跡が対象とする遺構となる。

2. 環境と地名

(1) 地理的環境

唐津地域は、東は背振山系を介して佐賀市・福岡県糸島市に、南は天山山系を介して多久市に、西は伊万里市と伊万里湾を介して長崎県松浦市に、北は玄海灘を介して長崎県壱岐市にそれぞれ接している。地質的には①東松浦溶岩台地域（通称：上場台地、以下、この用語を使用する）②松浦杵島丘陵地域③脊振山地西部域④唐津平野⑤島嶼域（東松浦半島沿岸部も含む）の五つに区分できる。このうち湊の舞台となった唐津の海や唐津平野・上場台地に所在する代表的な河川および島嶼について概観する（図2）。

①玄界灘

玄界灘は九州北岸の沖合で福岡県宗像市大島から長崎県壱岐島の間の海区を指す。この海区の中に唐津湾・唐房湾・名護屋浦・仮屋湾・伊万里湾などが含まれる。

玄界灘の歴史的特色は、古代・中世を通じて海上交通・対外交易に中心的な役割を果たした「博多津」を擁したことである。博多津は古代、遣唐使や遣新羅使の発着拠点となり、唐や新羅から派遣された国使の迎賓館としても機能した鴻臚館が立地し、対外交渉における独占的な地位を築いていた。

中世には鴻臚館の対外交易拠点としての機能を引き継ぐ中世都市博多が誕生した（大庭 2019）。

②松浦川

松浦川は別名松浦西川とも言う。武雄市と有田町の境にある黒髪山付近を源流とし、多くの小河川を合わせながら北流し、唐津市相知町で巖木川を合わせて唐津市街地の北東に位置する満島山の東麓を流れ、唐津湾に注ぐ川である。延長45.3^里の1級河川。

巖木川は別名松浦東川とも言う。唐津市巖木町椿山付近を源流とし、河川の支流を合わせながら西流する。唐津市相知町で松浦川本流と合流する。延長23.7^里。

徳須恵川は旧名を波多川ともいい、伊万里市南波多町の大陣岳北麓付近を源流とし、各河川の支流を合わせながら唐津市川原橋付近で松浦川と合流する。延長17.5^里。

③唐津平野東部

玉島川は唐津市七山村と福岡県糸島市二丈町の境にある荒川峠付近を源流とし、北流しながら小河川の支流を合わせて、唐津湾東端部に注ぐ川。延長16.3^里の2級河川。

横田川は旧唐津市と浜玉町内の境界付近を源流とし、北流して玉島川の河口付近で合流し、唐津湾へ注ぐ。延長5.5^里。

半田川は観音の滝付近を源流とし、鏡山南麓を北西に流れる。途中で宇木川・新川の支流を合流して西に流れ松浦川右岸に注ぐ。

④唐津平野西部

町田川は上場台地の竹木場付近を源流とし、北東に流れ唐津市街地へと入り松浦川河口に注ぐ川である。延長5^里。

佐志川は唐津市見借付近を源流とし、上場台地の東縁の崖下沿いを北流し、同市佐志で唐津湾に注ぐ川である。延長5^里の2級河川。

⑤上場台地

上場台地は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤の上に第三紀末期に噴出した東松浦玄武岩類が覆う溶岩台地である。沿岸部のリアス式海岸はところどころで深く入り組み、天然の良港を形成している。内陸部は平野が少なく河川に大きなものは見られない。上場台地を流れる河川は名護屋浦へ注ぐ瀧川、仮屋湾へ注ぐ有浦川、座川（そぞろがわ）などがある。

上場台地の歴史的的特色として、上場台地北部の名護屋一帯に、豊臣秀吉による文禄・慶長の役における前線基地となった名護屋城跡を中心とした諸大名の陣屋跡が散在していることが挙げられる。

⑥島嶼

唐津湾および伊万里湾周辺に所在する有人島の島嶼として、唐津湾に浮かぶ高島（唐津市）および玄界灘に浮かぶ神集島（唐津市）、加部島、小川島（以上、唐津市呼子町）、加唐島、松島、馬渡島（以上、唐津市鎮西町）、向島（唐津市肥前町）、伊万里湾に浮かぶ鷹島、福島（以上、長崎県松浦市）が挙げられる。このうち唐津市所在の島嶼では加唐島に大泊川、馬渡島に河内川が存在する。

島嶼の歴史的的特色として、古代の神集島では遣唐使、遣新羅使が大陸・半島へと渡る停泊地となったほか『延喜式』巻第二十八には「柏嶋牛牧」との記載があり牛牧が行われていたと考えられる。また、近世の小川島では組織的な捕鯨が行われていたことが挙げられる。

（2）歴史的地名

現在、唐津地域を指す「唐津（からつ）」および「松浦（まつうら）」という地名は、両者とも「津」や「浦」という文字が用いられ、海に臨んだ唐津の地理的特徴をあらわした地名である。また、唐津地域の沿岸部には湊を示す地名が数多くある（表1）。

表1 唐津の湊一覧

番号	地名／現在の地名	海・湾	立地：河川	行政区名
1	浜崎（はまさき）	唐津湾	河口：玉島川	唐津市浜玉町
2	満島（みつしま）／東唐津		河口：松浦川	唐津市
3	水主町（かこまち）		河口：松浦川	唐津市
4	新堀（しんぼり）		河口：松浦川	唐津市
5	材木町（ざいもくまち）		松浦川・町田川	唐津市
6	高島（たかしま）		島嶼	唐津市
7	大島（おおしま）		島嶼	唐津市
8	妙見（みょうけん）／西唐津		－	唐津市
9	佐志（さし）	唐房湾	河口：佐志川	唐津市
10	唐房（とうぼう）		河口：浦川	唐津市
11	相賀（おうか）		－	唐津市
12	湊（みなと）	玄界灘	橋本川	唐津市
13	神集島（かしかしま）		島嶼	唐津市
14	屋形石（やかたいし）		－	唐津市
15	小友（こども）		－	唐津市呼子町
16	呼子（よぶこ）	名護屋浦	河口：江頭川	唐津市呼子町
17	加部島（かべしま）	玄界灘	島嶼	唐津市呼子町
18	小川島（おがわしま）		島嶼	唐津市呼子町
19	名護屋（なごや）	名護屋浦	渦川・野元川	唐津市鎮西町
20	加唐島（かからしま）	玄界灘	島嶼：大泊川	唐津市鎮西町
21	松島（まつしま）		島嶼	唐津市鎮西町
22	馬渡島（まだらしま）		島嶼：河内川	唐津市鎮西町
23	波戸（はど）		－	唐津市鎮西町
24	串（くし）	串浦	－	唐津市鎮西町
25	外津（ほかわづ）	外津浦	志礼川	東松浦郡玄海町
26	仮屋（かりや）	仮屋湾	有浦川・座川	東松浦郡玄海町
27	菖津（しょうづ）		－	唐津市肥前町
28	京泊（きょうどまり）		－	唐津市肥前町
29	向島（むくしま）	伊万里湾	島嶼	唐津市肥前町
30	駄竹（だちく）		浦ノ田川・古久祖川	唐津市肥前町
31	星賀（ほしか）		－	唐津市肥前町
32	晴気（はれぎ）		－	唐津市肥前町
33	高串（たかくし）		新田川	唐津市肥前町
34	大浦（おおうら）		－	唐津市肥前町
35	杉野浦（すぎのうら）		－	唐津市肥前町
36	湯野浦（ゆのうら）		－	唐津市肥前町
37	波多津（はたつ）		－	伊万里市波多津町
38	黒川（くろかわ）		－	伊万里市黒川
39	鷹島（たかしま）		島嶼	長崎県松浦市
40	福島（ふくしま）		島嶼	長崎県松浦市

この唐津地域の歴史的地名は、弥生時代の『魏志倭人伝』に「末盧国（まつろこく）」と記されることが初見である。また、『古事記』中巻、『先代旧事本紀』巻十には末盧県（まつらのあがた・まつらがた）・末盧国造（まつらのくにのみやつこ・まつろこくぞう）と記載される。

8世紀に編纂された『日本書紀』巻第九および『肥前国風土記』では気長足姫尊（神功皇后）の新羅征討説話に関連して、当地を「梅豆羅国・希見の国（めづらのくに）」とし、その後、訛って「松浦」という地名になったとしている。

黒田裕一氏によると『万葉集』巻第五では「麻通羅（まつら）」や「麻都良（まつら）」と記され、当時は「まつら」と呼称されていたとする。また『魏志倭人伝』に記される通り、「まつろ・まつら」的な地名は古くから呼称されており、その後『記紀』編纂段階の8世紀前半までには「松浦」の地名が固有名詞としてあてられたと考えられるという（黒田 2008）。

一方、「唐津」の地名は、11世紀後半に大宰府の安楽寺の荘園のひとつの『安楽寺文書』に「辛津荘（からつのしょう）」という記載が見られるのが初見である。その後時代において、『有浦文書』の「波多廣押書（107）」正平23年（1368）4月13日付けで「唐津在津」との記載や、ほぼ同時期の建徳2年（1371）8月4日造立の紀年を持つ大聖院蔵の十一面観音坐像の胎内名に「肥前国松浦郡西郷唐津社本地堂本尊事」との一文が見られる。この記述から南北朝時代頃には、「唐津」の地名が成立していたことが推測される（岡崎 1982・宮武 1997）。しかし「唐津」の名称は継続的には見られず、一時的な地名表記に留まったようである。

再び黒田氏によると「唐津」という地名は唐津地域の支配権力であった松浦党諸氏の中に「唐津」の地名を冠する武将はいないことから、氏族や村の名前に附随するものではないことをふまえて、次のような推測をされている。

唐津の表記が確認される11世紀後半から12世紀には、博多をはじめとした九州の湊に宋人が居留地とした「唐坊・唐房（トウボウ）」が形成される。この「唐房」という地名は現在も唐津に存在しており、「唐房」および「唐津」は中国人居留地であるとともに大陸・半島へと渡る重要拠点・施設としての意味合いを持っていたとし、この「唐津」が拠点・施設的な呼称から、「松浦」に代わる地名的な呼称へと転化するの、後の15、16世紀になってからのことであると推定されている（黒田 前掲）。

3. 唐津における湊の変遷（古代～近代）

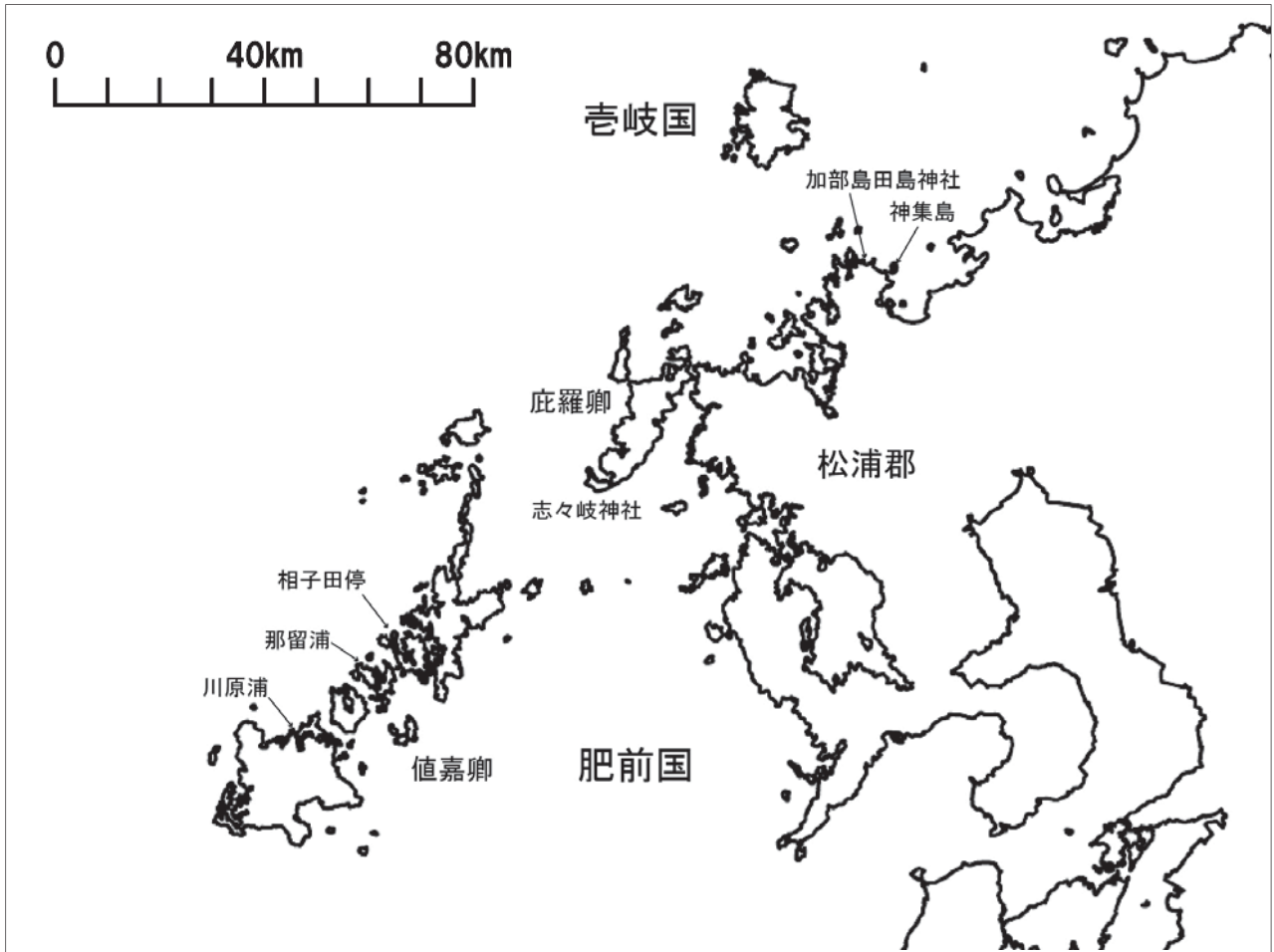
唐津における湊のはじまりは、日本の各地域と同じく漁撈に伴って小規模な湊が敷設されたものであったと考えられる。しかし旧石器・縄文・弥生時代の湊について具体的な様相は知りえない。弥生時代に記された『魏志倭人伝』には魏使が半島の狗邪韓国を出発し対馬国、壱岐国を経て九州島への上陸地点として「末盧国」へと入っている。このことから「末盧国」には魏使や他の船が出入りするのための湊が存在していたと考えられるが、今のところ考古学的な痕跡は残されていない。

弥生時代における湊の遺構としては、長崎県壱岐島で発見された原の辻遺跡の船着き場跡がある。この船着き場跡は突堤状の形状をなし、石積みや樹皮を貼り付け、木杭などの敷設をした護岸の機能を持った湊である。白石溪冨氏は出土した土器の年代観から紀元前2世紀後半以降と想定されている（白石 2020）。

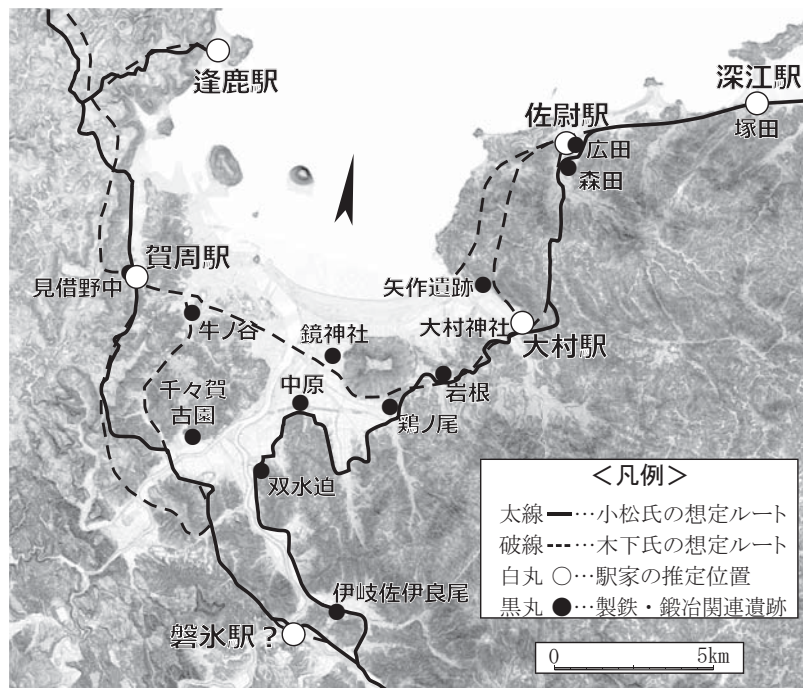
（1）古代：大陸・半島への湊

①古代の湊

古代の唐津地域は肥前国松浦郡にあたる。松浦郡の範囲は現在の行政区分では、東松浦郡（唐津市、



①松浦郡の範囲(S=1/706,000)



②推定古代官道のルートと郡衙関連遺跡(S=1/250,000)

図3 松浦郡の湊

玄海町)、西松浦郡(伊万里市、有田町)北松浦郡(松浦市、平戸市、佐世保市、佐々町、小値賀町)南松浦郡(五島市、新上五島町)と広大な面積を有していた(図3①)。

松浦郡について記した古代の文献は主に『肥前国風土記』『延喜式』『和名類聚抄』が挙げられる。『肥前国風土記』には松浦郡の古代行政組織として郷11所、里26所、駅5所、烽8所と記される。このうち『延喜式』巻第二十八には古代官道の駅として「磐水」(比定地不明)「大村」(唐津市浜玉町)「賀周」(唐津市見借)「逢鹿」(唐津市相賀、湊)「登望」(唐津市呼子町小友)が存在し、『和名類聚抄』には松浦郡の郷として「庇羅(ひら)」(長崎県平戸市)「大沼(おおぬ)」(比定地不明)「値嘉(ちか)」(長崎県五島市、新上五島町)「生佐(いきさ)」(唐津市伊岐佐)「久利(くり)」(唐津市久里)が存在したとする(註2)。

松浦郡に所在する古代官道のうち逢鹿の駅および登望の駅は陸路としての駅の終着点であり、ここから湊を出発し大陸や半島へと赴いた渡海拠点であったと考えられる(岡崎 1982)。

以下、古代の文献史料から唐津地域が大陸・半島への渡海・着岸拠点となったと考えられる事例を列挙する。

『日本書紀』巻第十四には、百済の蓋鹵王が日本に遣わした女性が「筑紫各羅嶋」で出産したと記録される。その子は「嶋君」と名付けられ、長じて武寧王となった。この「各羅嶋」は加唐島に比定される。

『肥前国風土記』には大伴狭手彦と恋に落ち、別離を悲しみ非業の死を遂げた松浦佐用姫伝説が伝えられる。この大伴狭手彦とは6世紀頃を中心に大連として活躍した豪族である。『日本書紀』には宣化天皇2年(537)、新羅が任邪を攻めたことから、任邪に渡海して戦いを鎮圧するとともに百済を救援したと記録される。大伴狭手彦は半島へと渡るため当地に赴き、松浦佐用姫と出会うこととなる。伝承に登場する「褶振の峯」「鏡の渡」などの地名は現在の鏡付近が比定地となることから、大伴狭手彦は半島への出兵にあたり、松浦川河口付近から渡海したと考えられる。

奈良時代から平安時代初頭の日本は、大陸の先進文化を学ぶことを目的に遣唐使を派遣した。遣唐使の派遣は舒明2年(630)に始まり、寛平6年(894)に終了した。この260年間の間に諸説あるものの12~20回ほど遣唐使を派遣したとされる。

遣唐使が大陸への往復に使った航路は、北路、南島路、南路の三航路と渤海路があったことが判明している。このうち松浦郡を経由した航路は南路である。第1~2次までの遣唐使航路は北路を使っていたが、7世紀半ばより顕著となった朝鮮半島の内乱によって航路を改めざるを得なくなった。第3次遣唐使派遣によって南路の開拓を行い、第4次の遣唐使派遣で初めて渡海に成功した。これ以後、南路は主要な航路となるが東シナ海を横断することから遭難する可能性が高かった。そのため遭難した船が、新羅に漂着することに備えて遣新羅使が派遣されるようになった(酒寄 2014)。

遣新羅使の航路は『万葉集』に収められた使者の歌から辿ることができる。中央を出発した遣新羅使は、筑前国の「韓亭」・「引津亭」を経て、肥前国松浦郡の「狛島亭(唐津市神集島)」に停泊し、壱岐島へと渡っている(松原 2004)。

『入唐五家伝』の『頭陀親王入唐略記』によると、貞観3年(862)真如親王は、入唐を目指し鴻臚館から壱岐へと向かったが、そこでの待遇に嫌気がさし、斑島(馬渡島)に渡っている。この斑島には白水郎が多くいたとする。その後柏島(神集島)に滞在し、宋の商人に造船を行わせている。約半年後、完成した船に乗って一度鴻臚館へと戻り、そこから入唐を果たしている。

この記述から当時の神集島には、外洋航海に耐えられる造船技術があり、中国商人がいたことが分かる。田島公氏によると外洋航海の船は楠の木で造ることから、この時に造られた船も楠製であった

と推測されている。なお、楠は暖地性の樹木で九州地方は主要産地となっている（田島 1997）。

寛仁3年（1019）に起こった刀伊の入寇は、『朝野群載』によると刀伊軍は初め対馬・壱岐に侵攻した。その後、怡土・志摩・早良の三郡に侵攻し、能古島や博多警固所まで攻めたが、大宰府政庁側や在地の武士勢力の活躍により、筑前志摩郡の船越湾において刀伊軍は敗走し西へと逃れた。刀伊軍は敗走先の松浦郡の唐津湾周辺に出没し、沿岸の村々に侵攻したため前肥前介源知（さきのひぜんのすけみなものしらす）らが郡内の兵士を率いて戦っている（関 2021）。

『小右記』万寿4年（1027）8月30日条には宋の商船が松浦郡柏島（神集島）に着岸している。また、『扶桑略記』巻第29および『元亨釈書』巻第16には延久4年（1072）には京都大雲寺の僧、成尋が松浦郡壁島（加部島）から「唐人船」に同乗して入宋している（徳永 1998）。

以上、古代の文献史料の記述から、松浦郡が大陸・半島への渡海拠点として重要な位置を占めていたことが窺える。次に考古学的な調査成果から見た松浦郡の湊について述べる。

②松浦郡の湊

古代の湊における公的な湊は郡衙に附随することから、郡衙の推定位置から湊の存在を追う（千田 2001）。松浦郡の郡衙の位置は現時点の研究において確定していないが、これまでの発掘調査成果による郡衙候補地として千々賀古園遺跡と中原遺跡が挙げられる（図3②）。

千々賀古園遺跡は、唐津市千々賀に所在する遺跡で松浦川支流の徳須恵川左岸の低平な沖積地上に立地する。唐津市教育委員会と佐賀県教育委員会によって過去3回の発掘調査が行われている。このうち平成8年（1996）度の調査では「コ」の字型配置をとる3棟の掘立柱建物跡が検出されている。この掘立柱建物跡群を、仮に郡衙政庁とすれば南北棟の1・2号建物跡が脇殿に相当し、東西棟の3号建物跡が正殿に相当するが、1～3号棟に隔絶性が見られず柱筋が通らず掘方が不定形であり、他の郡衙検出事例から比較して見劣りがすることから、郡庁ではなく郡庁に付属する倉庫群あるいは工房ではなかったかとしている（唐津市教育委員会 1997）。山口亨氏は更に遺跡が徳須恵川に近接することから積出港的な性格を持った湊があったのではないかと推定されている。また、山口氏は前述の掘立柱建物跡について千々賀古園遺跡の盛期が7世紀末を上限として8世紀にあたること、カキ目調整を施した平瓦や多数の墨書土器が出土していることをふまえて、天平16年（744）の『續日本紀』に記された壱岐嶋分寺の造営に関わる施設であったと結論づけている（山口 2004）。

なお、千々賀古園遺跡より下流に位置する徳須恵川と松浦川が合流する地点の左岸丘陵上では古代の瓦窯である川原橋窯跡が所在しており、発掘調査は行われていないがカキ目平瓦が採集されている。ここで焼成された平瓦は水運によって松浦郡や壱岐島の公的施設へと運搬されたのではないかと考えられる。

中原遺跡は千々賀古園遺跡から松浦川を挟んだ東岸に位置する。中原遺跡は西九州自動車道の建設に伴い大規模な発掘調査が行われ掘立柱建物跡、水田跡、流路や溝跡を検出し、木簡や多量の墨書土器が出土している。小松譲氏は『肥前国風土記』による肥前国府からの道筋となる官道の駅路の比定地と関連して、中原遺跡が8世紀後半から9世紀前半にかけて盛期を迎えるのは、公的な役割を担った在地首長が主導した湊の経営によるものとし、本遺跡が松浦郡における水上交通・交易の窓口港となったのではないかと推測されている（小松 2007）。

（2）中世：松浦党の湊

①中世の湊

中世の唐津地域は鎌倉幕府成立後、鏡荘には草野氏が鏡神社の大宮司となって入部して地頭職を果

たし、松浦荘には松浦党と呼ばれる佐志氏、神田氏、石志氏など各領主が割拠して治めていた。

松浦党とは嵯峨源氏の末裔と称し、地域に結びついた在地領主の集団で、その地理的な性格から海民・海の領主としての側面を持っていた。この松浦党が活動の場とした湊は大陸・半島で作成された文献資料上にも現れる（図4②・③）。

図4②は朝鮮通信使であった申叔舟が文明3年（1471）に著した『海東諸国紀』に付された「日本国西海道九州図」である。この絵図に見える九州島を囲むように描かれる白線は当時の航路を示している。九州の東西を縦断する航路や本州・中国大陸・朝鮮半島へと向かう航路が描かれ、同絵図には当時の領主である上松浦の佐志、鴨打、呼子や下松浦の志佐、田平などの松浦党領主の名前が見える。また、図4③は明の章潢が天文10年（1541）から天正5年（1577）にかけて編纂した『図書篇』中の「日本国図」、九州部分である。鄭若曾が編纂した『籌海図編』の系統を引く行基図で、九州における代表的な湊が記されている。『籌海図編』の編纂が永禄5年（1562）であることから、『図書篇』の図もほぼ同年代に作成されたと考えられ、16世紀中葉の港湾の立地を示していると考えられる。この絵図には唐津湾を示したものとして「此湖横直百八十里」と記されており、この「湖」を囲むように「法麻撒几（はまさき）」（唐津市浜崎）をはじめとした唐津湾沿岸地域の湊の地名が読み取れる。この大陸・半島からもその存在が認識されていた松浦党のうち佐志氏に関わる湊を見ていきたい。

②佐志の湊

松浦党佐志氏は現在の唐津市佐志を本拠とし、文献資料にみえる「佐志」の名称は、寛元2年（1244）の『山代家文書』中に登場する「佐志源次郎仰」を初出とし、以後、佐志氏の活動は史料上に散見される。

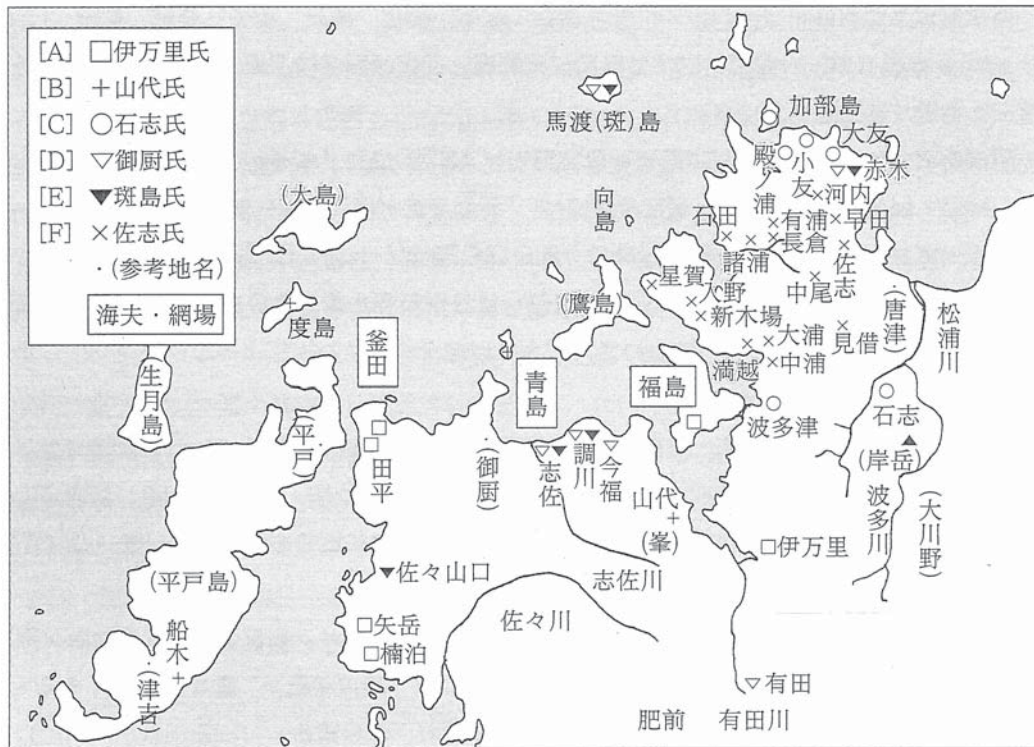
佐志は唐房湾に面し、西は上場台地と東にある松浦杵島丘陵地の間に挟まれた南北を流れる小河川の佐志川沿いに集落を形成している。この佐志川河口左岸には小規模な袋状のラグーンがあったとされ、この入海より湊が展開したとされている（宮武 2017）。

この佐志の湊について、筆者は宮武正登氏による一連の論考（宮武 1997・2008・2017）に依拠しつつ景観復元を行ったことがある（鮎川 2020）。今回、改めて佐志の湊の景観について言及したい。

景観復元にあたり、まず佐志氏に関連する各遺跡を紹介する。徳蔵谷遺跡・佐志中通遺跡・汐入遺跡・浜田城跡のうち、平成4～14年にかけて徳蔵谷遺跡・佐志中通遺跡が調査され、平成16・17年には汐入遺跡の調査が行われた。これらの遺跡は12世紀代から16世紀初頭までの集落が重複する複合遺跡だが、室町期の遺構を中心に見ていきたい。

徳蔵谷遺跡は佐志川の河口西岸に立地し、佐志川が運んだ土砂でつくられた砂丘と、西からせり出す上場台地の裾野との接点にあたる。主な遺構は船着き場遺構、大型掘立柱建物跡、池状遺構、堀跡、土師器皿窯跡、鍛冶遺構である。船着き場遺構とされたのは、水際に向かって凸状に伸びだすように石垣が積まれ、石垣に沿うように杭列も並んでいたからだが、その北側の約200 m 先には大型の掘立柱建物跡があり、建物跡に伴う遺構から瓦器風炉、香炉、石臼など、茶道具と考えられる奢侈品が出土しており、この空間は領主クラスの館・屋敷地だと考えられる。また、大型建物跡に付随する施設として建物跡の北側で池状遺構や堀跡が発見され、南には土師器皿窯跡や鍛冶遺構など小規模な工房が見つかっている。

佐志中通遺跡は徳蔵谷遺跡と同じ砂丘上の北側に接する遺跡で、礎石建物跡や道状遺構を検出している。礎石建物跡は平面形5 m ×3 m 程の小型の建物跡であり、礎石を伴う構造であることから、土蔵造りの倉庫と考えられる。道状遺構は床面が硬化し、平坦な道にはなっているが粗雑な造りである。この道の幅は約2～3 m ほどで主軸は南北にあり、東西には約1～1.6 m ほどの小道が伸びていた。



①松浦党所領範囲 (宮島 2006 より転載)



②「日本國西海道九州之圖」『海東諸国紀』
(田中 1991 より転載)



③「日本国図」『図書編』
(松下 1975 より転載)

図 4 松浦党の湊

延びた小道はそれぞれ区画を造り、各区画内より集石土壙や井戸跡などの生活痕跡を示す遺構が見つかっている。遺構の様相や出土遺物の多彩さから、市場の可能性が指摘されている。

佐志中通遺跡では、多量の貿易陶磁器が出土し、西北九州における周辺の調査例と比べても屈指の出土量を誇る。これらの遺物は、おそらく市場において商取引されたものと考えられる。中国陶磁器の内訳は龍泉窯・同安窯系のほか、磁竈窯系黄釉盤や磁州窯系白磁鉄絵壺、青花碗・皿・杯などで、朝鮮陶磁は高麗末期から朝鮮王朝前期の象嵌青磁、粉青沙器の瓶・碗・杯が多量に出土している。また、ベトナム産の白磁稜花皿や白磁鉄絵短頸壺といった東南アジア産の陶磁器も含むなど、交易港として栄えた佐志の湊の姿を具体的に示している。

汐入遺跡は佐志川中流域の丘陵地と台地が東西に迫る狭い平野に立地する。主な遺構として杭状遺構と流路跡が確認されており、遺構は高さ1mほどの杭が佐志川に併行して約12m並んで残存していた。この杭列の脇では流路跡が確認され、漆器碗が出土したことから中世期の遺構と考えられる。この遺構は往時の河川流路に沿って直線的に並んだ護岸施設であり、徳蔵谷遺跡で確認された船着き場遺構とともに、中世の河川管理や湊の実態を示す好資料である。

浜田城跡は佐志川河口東岸の独立丘陵地に立地する山城で、眼下に佐志集落および唐房湾を一望できる。近世末期に編纂された『松浦昔鑑』や『松浦古事記』の地誌には、佐志氏の居城とある。また『松浦記集成』では天曆元年（947）「佐志将監」により築城されたとあるが、一次史料ではないため定かではない。現在、浜田城の山頂部を中心に残る曲輪、土塁、堀切などの特徴から、15世紀代の城郭の要素を持つとされ、その最終整備段階の下限は16世紀前葉に比定されている（宮武 2017）。

図5①②が佐志の湊の景観復元図である。時代は室町期を想定し、地形の復元などは宮武正登氏の研究を参考にした（宮武 前掲）。まず、湊に入るにあたって、海側からのランドマークとなったのが、向かって左に見える黒崎山と、右に見える往時は岬状に海へと突き出した浜田城が築かれた丘陵である。より遠くからの眺めでは、唐津湾と唐房湾を分かち大島も、ランドマークとしての機能を果たしていたのかもしれない。

徳蔵谷遺跡・佐志中通遺跡の発掘の成果をもとに、集落の構成を見ていくと、佐志川河口西岸に広がるラグーンに船を係留し、海辺の近くに石垣造りの足場を設けた荷揚げ場を敷設した湊がある。湊の北西に領主クラスの館が建ち、さらにその北側には、土蔵造りの倉庫が並ぶ。この倉庫で湊から荷揚げされた物資を保管したと考えられる。倉庫の北側は、物資の商取引が行われた市場であろう。つまり、徳蔵谷・佐志中通遺跡は各遺構群から見て湊として必要な施設を持ち、交易によって得た物資が集まり、売り買いされるという一連の流れを追うことができる遺跡である。また、その遺構の配置から湊に対して在地の領主である佐志氏と寺社の介在を窺うことができる。

③上場台地の湊

中世末期、豊臣秀吉は文禄・慶長の役に際し、朝鮮侵攻の拠点として上場台地の名護屋の地に城を築いた。『肥前名護屋城図屏風』（図6①）はその当時の様子を描いたもので、名護屋城と諸大名の陣屋が描かれる。諸大名はここを渡海拠点として壱岐・対馬を経て釜山へと渡った。この図には名護屋浦、呼子浦、波戸浦、串浦における湊の様子が描かれている（図6）。

名護屋浦は上場台地における最大規模の浦で、矢倉を持ち、紋幕を張る安宅船が浮かんでいるのが確認できる。また浦内の入江には人や荷物を載せた小舟が行き交う様子や岸に繫留している様子が多数描かれている（図6②）。

呼子浦は集落が展開している東側（画面左側）の砂浜に小舟が幾艘も繫留している様子が見取れるが、西側（画面右側）は磯浜のような表現をされている（図6④）。波戸浦や串浦も同様に小舟が

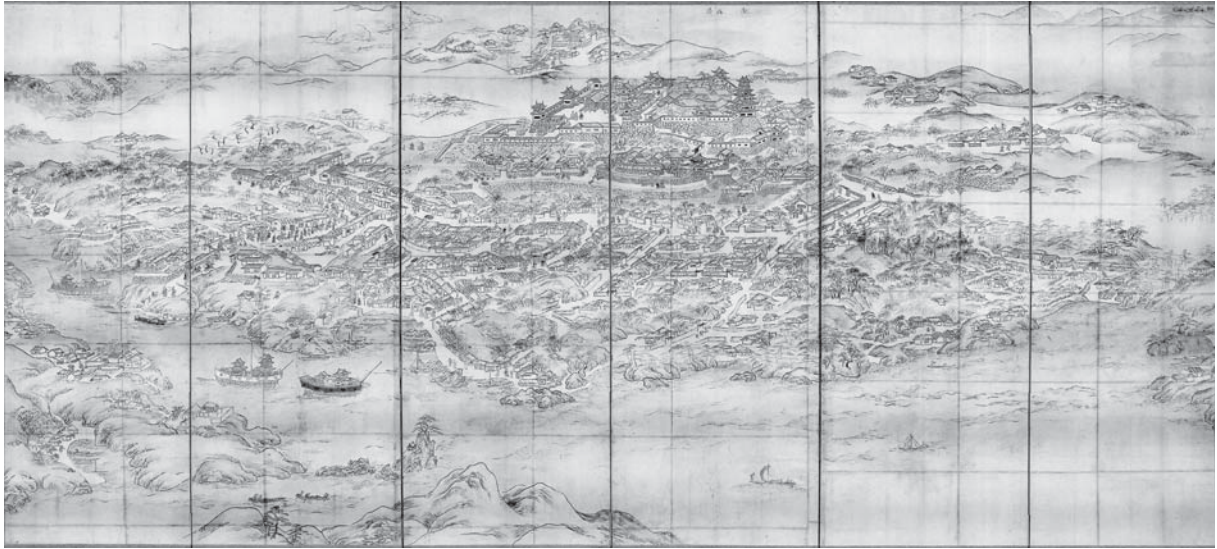


①佐志の湊遠景（航空写真：南西から）



②佐志の湊景観復元図（室町期）

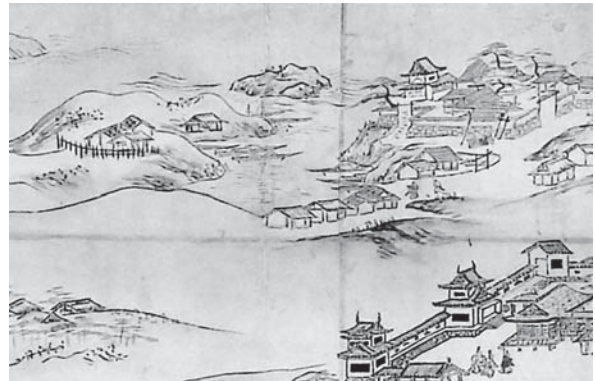
図5 佐志の湊



①『肥前名護屋城図屏風』(佐賀県立名護屋城博物館蔵)



②名護屋浦



③串浦



④呼子浦



⑤波戸浦

図6 上場台地の湊

繋留している様子が描かれる（図6③⑤）。

（3）近世：唐津藩の湊

①近世の湊

文禄2年（1593）5月、上松浦党の盟主であった波多三河守親は、文禄の役の際に改易となり、その後、寺沢志摩守広高は波多氏旧領である唐津6万3千石を領有した。慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの戦功により天草4万石を加えられ、さらに慶長19年（1614）には怡土郡2万石を得て、12万3千石を領有する大名へと成長した。しかし寺沢氏二代の兵庫頭堅高が正保4年（1647）に没すると、嗣子がいなかったことから断絶してしまう。その後、一時幕府領となったが、江戸時代を通じて譜代大名である大久保・松平・土井・水野・小笠原氏の順番で転封が続いた。

唐津城は慶長7年～13年（1602～1608）に寺沢志摩守広高によって築かれたと伝えられる。また近世城下町の形成は、城郭の築城とあわせて整備されることが多いことから、唐津城下町の形成も唐津城の築城と並行して造られたと考えられるが、具体的に示す史料は残されていない。

唐津城は唐津湾に臨む満島山の山頂を本丸とする。本丸には天守台について記した文献や絵図での描写が見られるが、天守が建てられていたことを示す資料はない。二ノ丸には藩主が居住する御殿や政庁があり、藩校、江戸在勤者の宿泊所、家臣の屋敷等があったとされる。二ノ丸と三ノ丸の間は、二ノ門堀と呼ばれる内堀で隔てられ、三ノ丸には唐津神社が鎮座し、家老をはじめとした上級武士が多く居住した。三ノ丸の南には外曲輪と呼ばれる町人が居住していた内町が広がる。この内町は堀に囲まれた城下町である。内町の東側にも城下町（外町）が続く。この外町には魚屋町、塩屋町、材木町、大石町、加子（水主）町、新堀町など、川や海に関連した町名が多く見られる（図7）。

唐津藩をはじめとする海付きの諸藩は、所有する船の維持・管理のため湊や湊に関連する施設の整備を行い、その担い手として船手と呼ばれる水軍を有していた。唐津藩における船手の役割は多様で、軍役のほか自藩の年貢米の廻送や専売品の売却、長崎警備の監督や巖木・七山の幕領からの年貢米廻送を担っていたことから、唐津藩の組織の中でも特に重要な位置を占めていた（久野 2011）。

また、江戸時代後期の唐津藩内には次の浦があった。満島浦、水主町、新堀、高島、大島、唐房浦、相賀浦、湊浦、神集島、小友浦、加部島、小川島、加唐島、名古屋浦、波戸浦、外津浦、仮屋浦、菖蒲浦、京泊浦、駄竹浦、星賀浦、晴気浦、高串浦、大浦、杉野浦、畑津浦、黒川浦、以上28の浦に浦庄屋が置かれており、唐津藩は浦庄屋を介して浦の人口、船数、船主の実態を把握していた。

②唐津城下の湊

唐津城下の湊は近世の図像資料において、その位置・構造などが描かれることから、以下に示す3点の資料から湊の様子を見てみたい（図7・8）。

「肥前国唐津城廻絵図」（正保年間：1644～1648）以下、正保絵図とする（註3）。

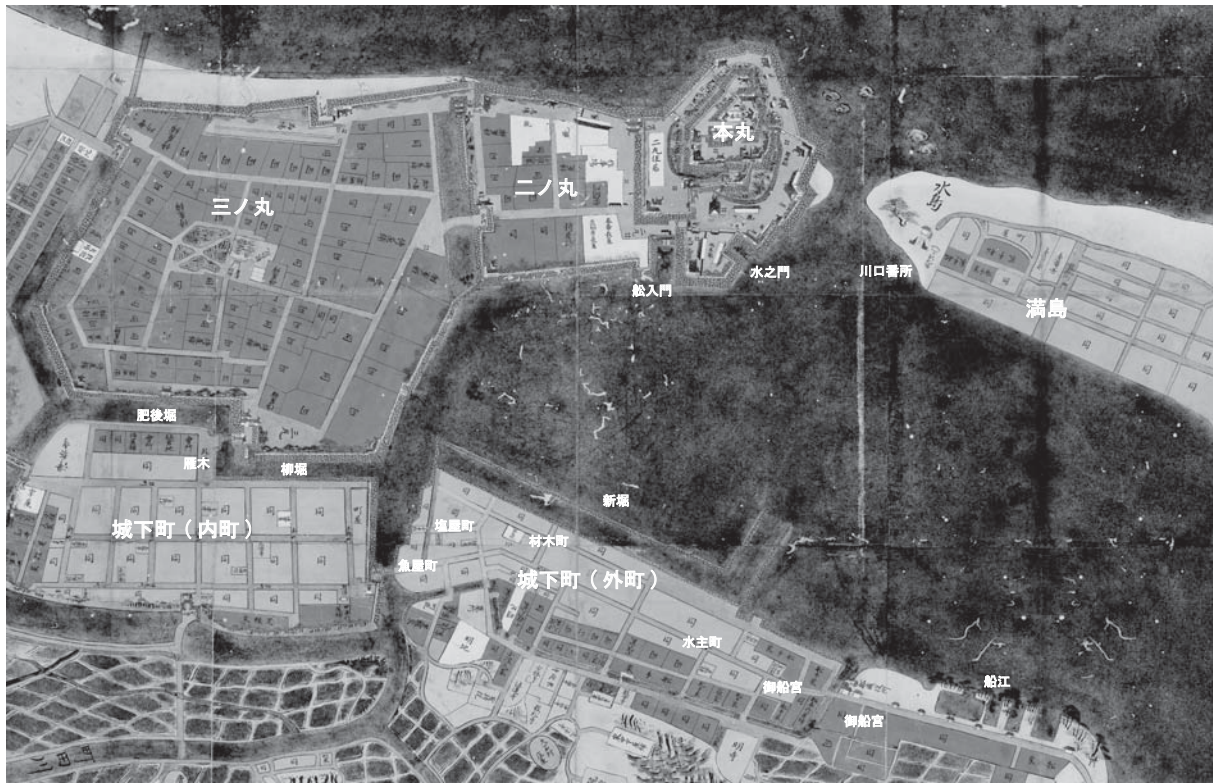
「肥州唐津城内図」（宝暦年間：1751～1763）以下、宝暦絵図とする（註4）。

「唐津城下図」（幕末～明治初期）以下、幕末絵図とする（註5）。

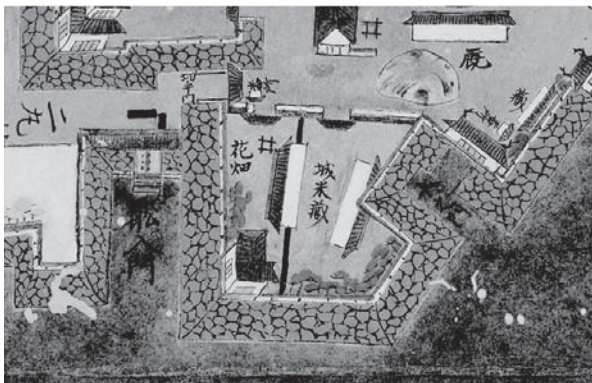
上記の資料から読み取れる湊をそれぞれ立地する場所から「本丸の湊」「内町の湊」「外町の湊」「御船宮の湊」「満島（水島）の湊」とする。

本丸の湊は「水之門」と「船入門」がある。「水之門」は唐津城本丸南東側の松浦川河口に、「船入門」は本丸南西側に位置していた。正保絵図の「水之門」、宝暦絵図の「船入門」の描写では松浦川に向けて階段状に開口している様子が見られることから、共に雁木の構造であったと考えられる。

この二つの湊は唐津藩の最重要拠点である本丸に接続する湊のためか、絵図には番所が描かれる（図



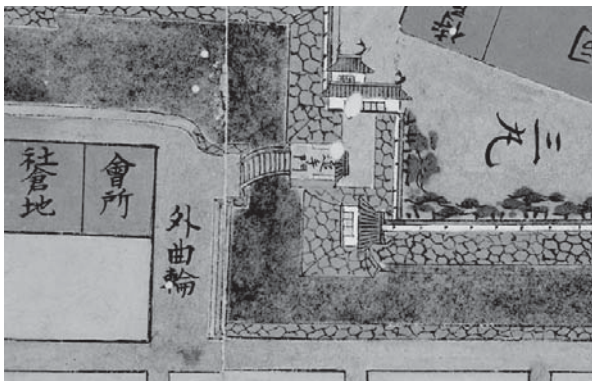
①唐津城下の湊「肥州唐津城内図」(唐津市教育委員会蔵)



②本丸の湊(水之門・船入門)



③本丸の湊(水之門・船入門)

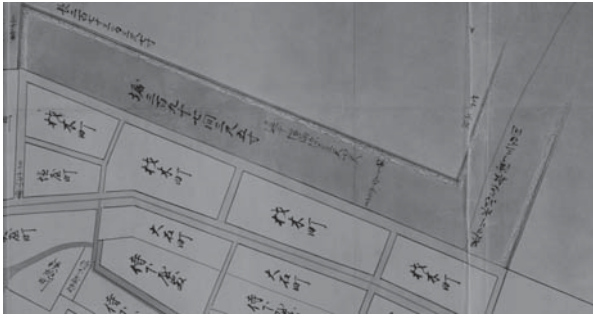


④内町の湊(雁木)

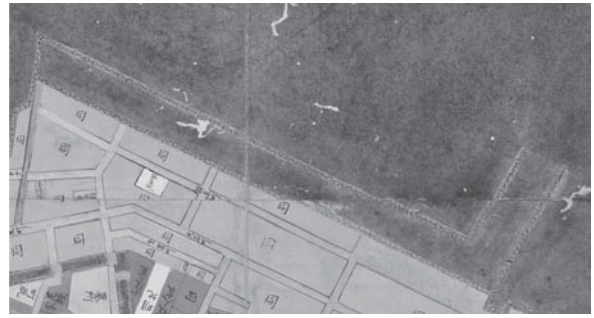


⑤内町の湊(雁木)

図7 唐津城下の湊



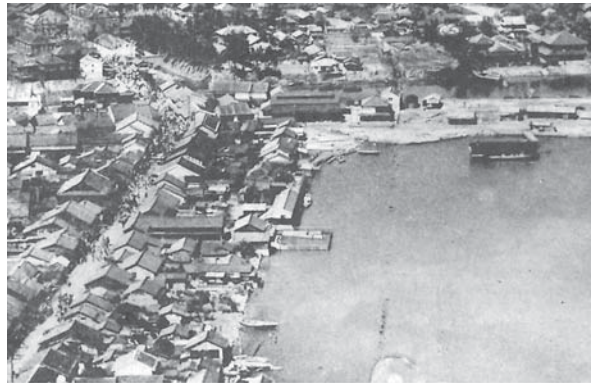
⑥外町の湊(新堀)



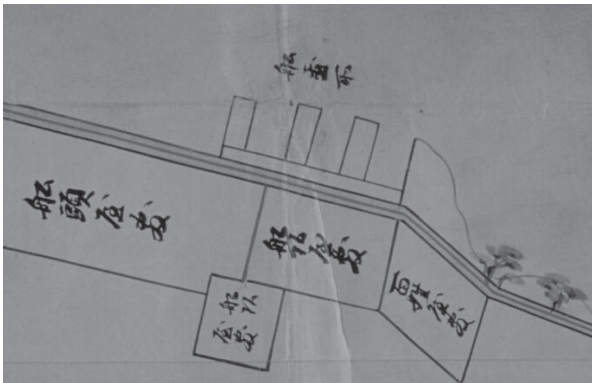
⑦外町の湊(新堀)



⑧外町の湊(南西から)



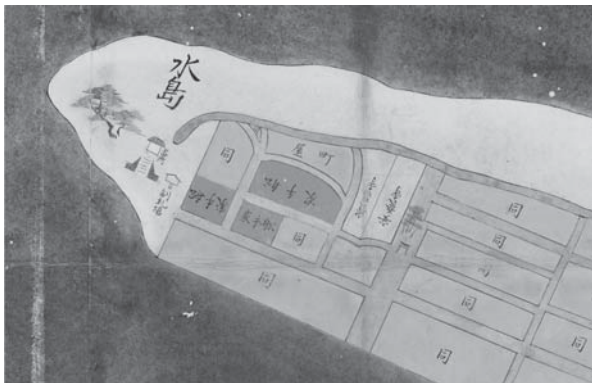
⑨外町の湊(西から)



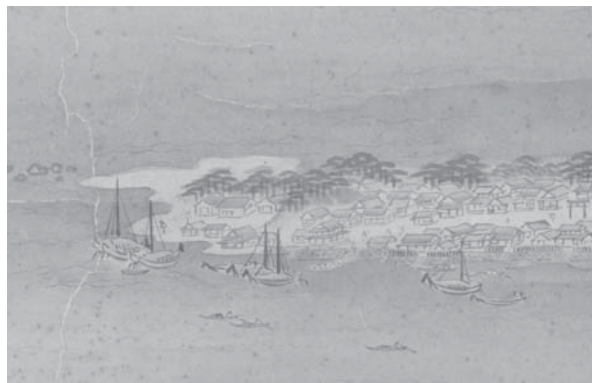
⑩御船宮の湊(船江)



⑪御船宮の湊(船江)



⑫満島(水島)の湊



⑬満島(水島)の湊

図8 唐津城下の湊2

7②③)。また、絵図の描写から読み取れる限り次のような機能を持っていたと推測できる。大久保時代（慶安2年（1649）～延宝6年（1678））頃を描いたとされる「唐津城図（仮）」（註6）には「水之門」において御座船など藩主や身分の高い人物が乗船する船が描かれる。一方、「船入門」には、年貢米を積んだ荷舟が切手門を通り、唐津藩の「御米蔵」へと荷揚げする様子が描かれる。よって、この絵図から読み取れる情報としては、藩主や身分の高い人物が出入りするのために使用する「水之門」、年貢米を米蔵へ運ぶ荷上場としての「船入門」と役割分担をしていたのではないかと考えられる。

内町の湊は三ノ丸と城下町を区切る柳堀と肥後堀の境にある大手口付近の内町（城下町）側に設けられていた。宝暦絵図・幕末絵図ともに階段状の表現がなされていることから、船から物資の積み下ろしをするための雁木が設けられていたことが分かる（図7④⑤）。この内町の湊は松浦川河口より柳堀を通して、雁木へ向かうことができ、直接、内町（城下町）へとアクセスできる場所であった。

外町の湊は材木町に接して松浦川河口に位置する湊である。この湊は『松浦叢書』に所収される「松浦要略記」によると「前略 材木町は惣町御取立の割捨濱にての所、志摩守様天守臺より御遊覧被候處、城下に船着きの所無是候間、水堀ほらせる様被仰付、後略」「松浦要略記」『松浦叢書』※傍線筆者（註7）という由来が残る。また、正保絵図には法量として「堀三百九十七間三尺五寸」と記し、江戸時代後期の絵図「肥前国唐津之城」（佐賀県立図書館蔵）には、この堀を指して「新堀」と表記する。

図8⑥⑦の描写では材木町から川側へ平面形L字状に伸び出すように表現されている。現在この湊は近代の埋め立て工事により、その構造を知ることはできないが埋め立て前に写された古写真から河川内にわずかな石列の痕跡が見られ、近代まで残存していたことが分かる（図8⑧⑨）。

この外町の湊は潮の満ち引きや松浦川が運んだ土砂によって浅くなった川床によって船が座礁することを防ぐため、河川内に石垣を築き、内部を浚渫して使用していたと考えられる。

船宮町の湊は唐津水軍の拠点となった「船江」がある。船江は松浦川に面し、藩が所有し、藩主や重臣および役人が公務で用いる御手船を停泊させる湊であった（久野 2011）。正保・宝暦絵図に描かれる船江には船を係留させる船溜まりや河川に突き出す堤防が見える（図8⑫⑬）。

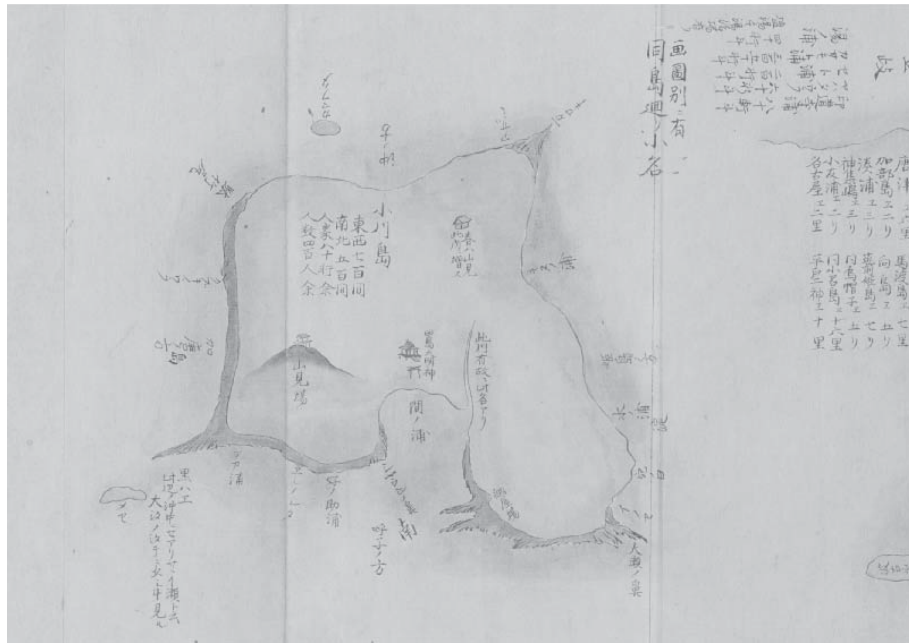
満島（水島）の湊があった満島は松浦川に面して加子屋敷が、唐津湾側には船頭屋敷や浦町があり、砂丘の突先にあたる西端には入港する船の船改めを行った川口番所が置かれていた。幕末絵図の描写では満島の南側（松浦川側）に階段状の雁木が描かれる。一方、満島西端の河口部分では砂浜の前に舟が停泊する描写から、砂浜に舟をそのまま着岸していたと考えられる。これは近代の古写真においても、舟が砂浜に着岸している様子が撮影されている。

以上、唐津城下における湊は、それぞれ立地する場所で役割・機能が分かれており、これらの湊はひとつで完結するものではなく、有機的な繋がりを持って関連していたと考えられる。

③島嶼の湊

唐津地域を含む西海地域では近世から近代にかけて鯨漁が盛んであった。捕鯨の方法は、17世紀初め頃は突取捕鯨であったが、享保年間（1716～36）頃から網掛突取捕鯨が導入されたと考えられている。この鯨漁を専門に行う組織は鯨組と呼ばれ、唐津藩領では小川島漁場において呼子の中尾甚六鯨組を中心に捕鯨が盛んに行われていた。その様子は捕鯨図説と呼ばれる『肥前州産物図考』や『勇魚取絵詞』などに描かれている。

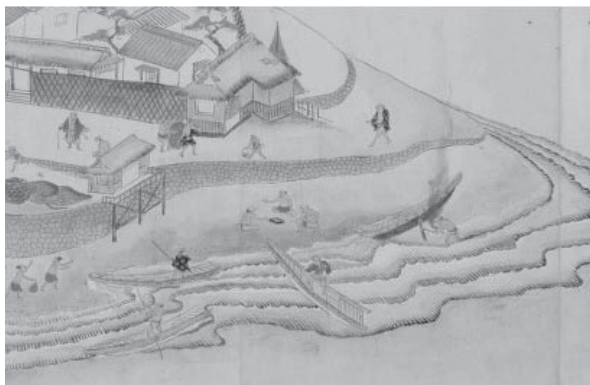
図9①は『肥前州産物図考』に描かれた小川島の平面図。図9②は同書に所収される「小児の弄鯨一件の巻」。この図説には小川島漁場における沖場で仕留めた鯨を解体するため納屋場へと運ぶ様子を描いている（註8）。



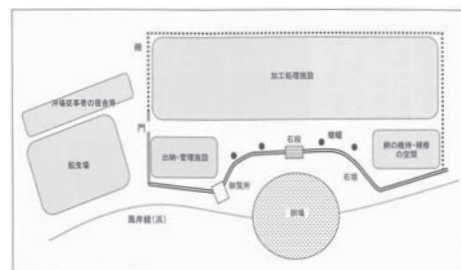
①小川島平面図『肥前州産物図考』



②小川島納屋場の様子『肥前州産物図考』



③焚場の様子『肥前州産物図考』



④「小川島納屋場平面構造」

(安永 2009 より転載)

図9 島嶼の湊

この捕鯨図説の納屋場構造を分析された安永浩氏によると、鯨組の組織は捕らえた鯨を陸上で解体・処理する納屋場での作業を効率良く行うため、その役割・機能ごとに納屋場の空間をうまく使い分けて施設を配置していたという（安永 2009・図9④）。

捕らえた鯨は頭から浜辺につけられ、捌場という場所で解体されているが、捌場から陸側には石垣による段差が設けられており、階段を登った正面には解体された鯨の部位を加工処理する施設、左側には藩主等が解体の様子を視察するための「御覧所」が海側へせり出し、右側には網干場が見られる。

図9②の画面右側では浜辺の焚場が描かれる（図9③）。焚場とは木造船の船底にフジツボやカキなどの貝類や海藻が付着するのを防ぐため、船底を焼いて乾燥させる場所を指す。

このように小川島における湊とは、捕鯨という水産資源を獲得することに特化したという特殊性はあるが、近世の唐津藩内における湊の一端が窺える。

（4）近代：石炭と湊

①近代の湊

幕末の唐津藩は佐幕派に属し、最後の藩主である小笠原長国の子、長行は藩主の世子のまま幕府老中となったが、戊辰戦争の始まりとともに唐津藩は新政府軍から討伐の対象となった。そこで長国は長行を廃嫡し、領内で豊富にとれる石炭を献上することによって、明治政府への取り成しを行った。

唐津藩存続の鍵となった石炭産業は享保年間（1716～1735）、岸岳の北西にあたる岸山ドウメキで農夫が耕作中に偶然、露頭した石炭を発見したことに始まる。幕末になるとこの唐津炭田には薩摩藩、肥後藩、久留米藩、佐賀藩など他藩から採炭に訪れる主要な産業となり、幕末から明治時代初期にかけて日本全体で産出された石炭の約30%が唐津産を占めるほど繁栄した。

この唐津炭田から産出する石炭の運搬は①坑内運搬②坑口から土場（松浦川上流船着場）まで③土場から東唐津の湊（松浦川河口）まで④東唐津の湊から消費地までというプロセスを経ていたことから石炭積出港としての港湾整備が大きく進んだ（東定 1993）。

②東唐津と西唐津の湊

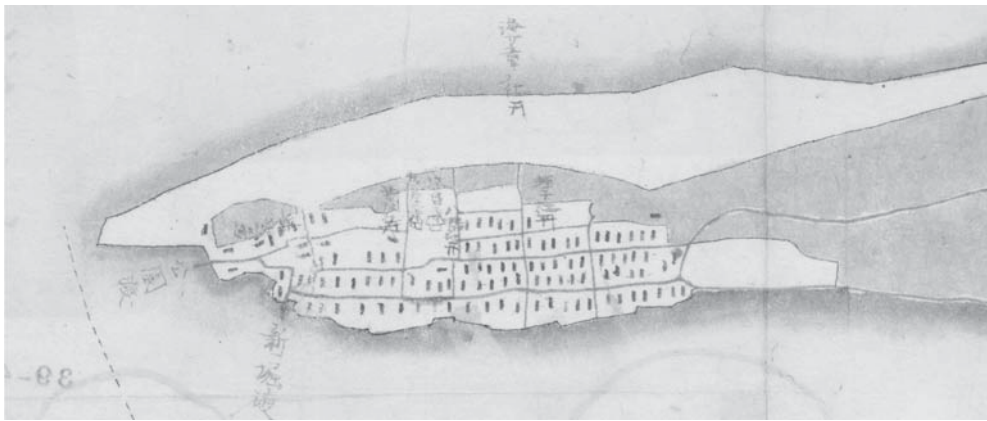
近代唐津の石炭積出港として港湾整備が行われた湊は、東唐津の湊と西唐津の湊が挙げられる。

東唐津の湊は満島と対岸の唐津城がある満島山を指す。江戸時代以来、松浦川河口という立地から唐津の湊の中心地としての地位を占めていた。大正12年（1923）に刊行された『満島村誌』には石炭の積み下ろしの様子が次のように描写されている。「大形の汽船及び帆前船は高島沖に停泊し、和船は川口に輻輳して帆檣林をなし川舟の石炭搭載頻繁なりき、（略）松浦川河口の繁忙極度に達し実に川舟千七八百艘舳を並べて川上より鳥島近く漕ぎ下る（註9）」とあり湊の繁栄を窺わせる記述となっている。

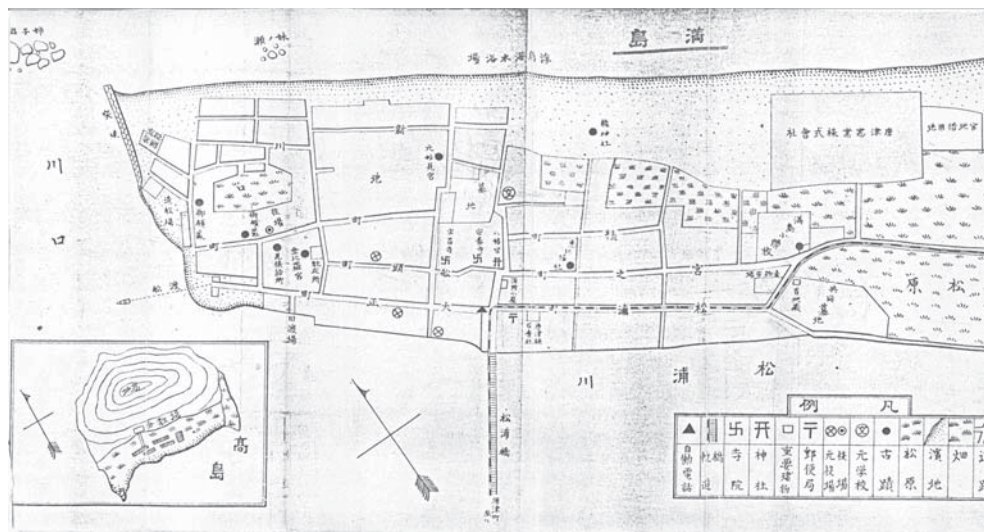
明治前期の唐津には、海軍省管轄下の官営鉱山である海軍炭坑が設置された。海軍炭坑は明治5年（1872）4月に唐津海軍出張所として設置され、明治8年（1875）5月、唐津石炭用所と改称する。その後、明治23年（1890）に廃止されるまで経営は続いた。

当初、松浦川河口の満島に設置されていた用所は、設置から僅か7年で石炭の積み下ろしに支障をきたした。そのため、明治14年（1881）対岸の唐津公園内に移転することになる。移転に先立ち、波止場石垣の新築や渡船場の付け替えなど湊の施設整備が行われた。

図12①は、秋山博志氏が文献資料等をもとに復元された「唐津石炭用所配置図」である。この図によると松浦川沿いに突き出す構造物は、石炭を積み下ろす波止場である。この波止場は第一号から第五号まで設けられ、移転に際し第一号、第二号波止場が整備され、明治18年（1885）に第三号、明治



①「東松浦郡町村図 (甲) 満島」 (明治 14 年)



②「満島」『満島村誌』 (大正 12 年)



③「米国陸軍撮影空中写真による地形図 満島」 (昭和 30 年)

図10 東唐津の湊

20年(1887)に第四、五号波止場が建設された。これらの波止場は表面を石材で覆い、松浦川に向かって傾斜したスロープ状に描かれていることから、雁木の構造であったと推定されている(秋山 2017)。

唐津城下に築かれた「唐津石炭用所」は官営の湊として整備されたが、明治海軍の第一期軍備拡張計画に基づき、イギリスなどに発注した新造の軍艦の燃料として唐津産の石炭は不適とされた。このため明治23年(1890)に唐津石炭用所は廃止された。

上記の通り、東唐津の湊では松浦川がもたらした土砂の堆積によって川床が浅く大型船の着岸ができない問題を抱えていた。更に幕末から明治前期にかけて唐津炭田は筑豊炭田や他の産炭地と比べて、松浦川による川船を用いた運搬距離が短く輸送のコストが少ないことが繁栄の一因となっていたが、筑豊炭田や他の産炭地において鉄道が敷設されると、この優位性が揺らぎ、石炭の採掘量は次第に筑豊炭田が唐津炭田を上回るようになっていった。こうした問題を解決するため西唐津の湊の整備が行われるようになる。

西唐津の湊は妙見と唐津湾に浮かぶ大島の間を指す。この西唐津の港湾整備に先立ち唐津興業鉄道が計画され、明治32年(1899)には西唐津-巖木間の鉄道が開通した。この鉄道の敷設と同時期に西唐津の湊の整備、開港することが計画され大島小太郎、奥村五百子らが明治政府を相手に奔走した。明治41年(1908)には港湾整備の一環として、大島小太郎が大規模な埋め立て工事を行い、三菱の石炭販売事務所である三菱合資会社長崎支店唐津出張所(後の唐津支店)が建設された。また、明治42年(1909)には、芳谷炭坑の経営者竹内明太郎が、竹尾年助を招いて芳谷炭坑株式会社唐津鉄工所を設立するなど港湾整備が進んでいった。

図10・11は明治時代から昭和時代中期に描かれた図像資料から、東唐津と西唐津の湊の変遷を追ったものである。東唐津の湊では港湾整備による大きな変化は見られないが、西唐津の湊では明治14年(1881)の「東松浦郡町村図(乙)唐津村、妙見浦、大石村」(図11①)では入江状の砂浜のような表現になっていたが、明治41年(1908)の大規模な埋め立て以降を描いた大正6年(1917)の「唐津町精図」(図11②)では大きく姿を変えており、その後、昭和30年(1955)の「米国陸軍撮影空中写真による地形図 佐志」(図11③)では更に港湾整備が進んでいることが窺える。

③松浦川の湊

近世以来、唐津地域の水運による物資の輸送の大部分は松浦川が担っていた。近世の松浦川の河川沿いには年貢米や材木・竹などを積み出し、唐津からは魚類や物資を積み下ろす港である「土場(ドバ)」が造られていた。石炭の輸送も同様に、各炭鉱から掘り出され、この土場から川舟によって松浦川河口まで運ばれた(図12④)。これらの土場は近現代の河川改修によって現存しない。

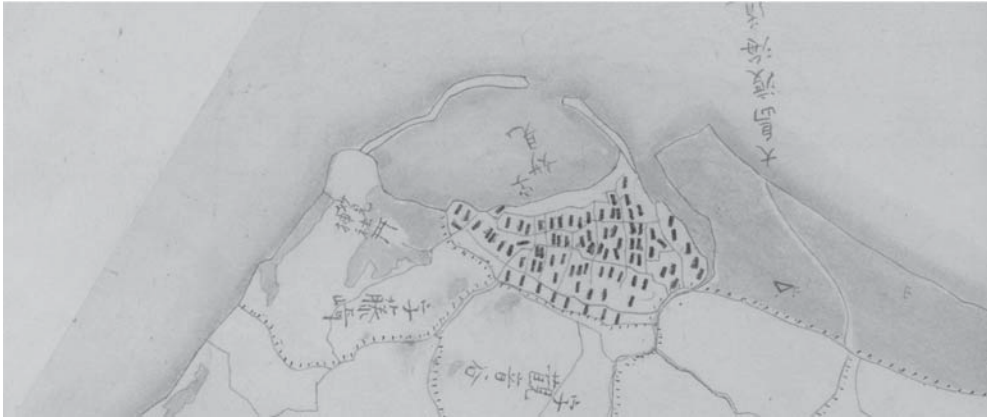
図12の②③は松浦川を往来した川舟の様子である。図12②は『肥前州産物図考』に描かれた「岸山村の石炭採掘」で石炭を川舟に運び込むところが描写される。図12③は大正時代に写された古写真で石炭を積んだ川舟が松浦川を下る様子が撮影されている。

以上のように近世以来、松浦川を介した水運は活発に行われていたが、昭和49年(1974)に完成した松浦大堰の設置など、近現代の河川改修によって舟を用いた河川の往来は無くなった。

④町田川の湊

平成30年(2018)に町田川河川改修に伴う唐津城下町の発掘調査が行われた。調査地点は唐津市街地を南北に流れる町田川の東岸部にあたる城下町の魚屋町である。調査区一帯は近世期に「西ノ木屋」と呼ばれた唐津有数の商家の一区画にあたり、現在でもその存在が知られている。

西ノ木屋とは、泉州堺の豪商であった木屋利右衛門が、天正19年(1591)の肥前名護屋城築城の際に、豊臣秀吉の命に従い、築城材木積運船船頭として泉州堺より唐津に移り住んだという由緒がある。



①「東松浦郡町村図(乙)唐津村、妙見浦、大石村」(明治14年)

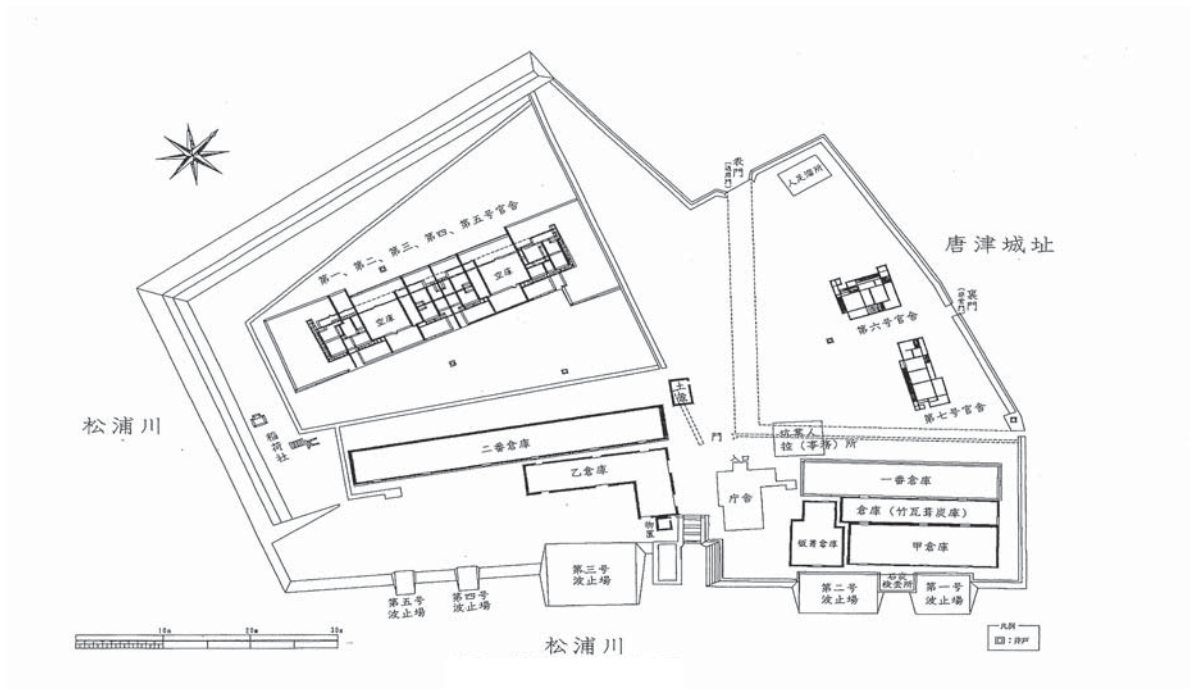


②「唐津町精図」(大正6年)



③「米国陸軍撮影空中写真による地形図 佐志」(昭和30年)

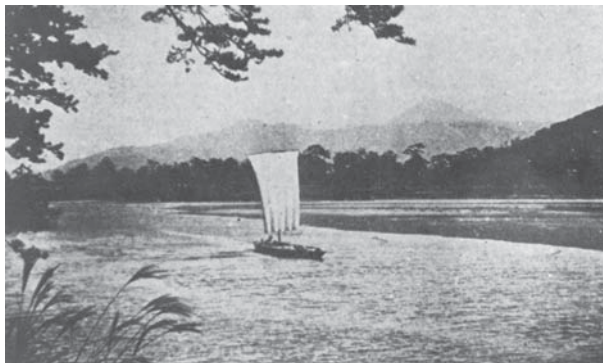
図11 西唐津の湊



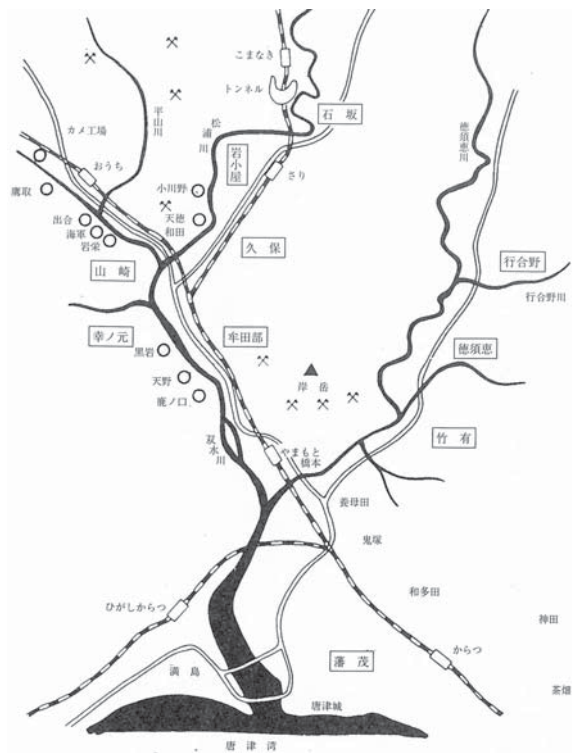
①唐津石炭用所配置図 (秋山 2017 より転載)



②「岸山村の石炭採掘」『肥前州産物図考』



③「石炭の川下ろし」(松浦文化連盟 1981 より転載)



④唐津土場位置図 (坪内 1999 より転載)

図12 松浦川の湊

この発掘調査において近代の船着き場遺構を検出している。この遺構は東から西へと傾斜する幅2.5mのスロープ状となる通路が町田川へ向けて開口している。通路両脇には通路敷石がかろうじて残存していたが、図13①の通路中央に見える現代土管の埋設時に多くの敷石石材は撤去されていた。地元の聞き取りによると、このような船着き場のことを「ズラシ」と呼んでいたようである。この「ズラシ」は町田川沿いの至るところに設けられていたという（唐津市教育委員会 2021）。

また、図13②の大正時代末期頃の古写真を見ると子どもたちが川遊びをする後ろには河川に浮かぶ川舟や川側に向けて開口した白壁の土蔵のようなものが確認される。前近代の町田川流域では交通・交易に関わる河川と人々の結びつきは密接であったと窺えるが、このような景観は河川改修に伴う護岸整備とともに姿を消してしまった。



①「ズラシ」検出状況

（唐津市教育委員会 2021 より転載）



②「町田川の川遊び」

（松浦文化連盟 1981 より転載）

図13 町田川の湊

おわりに

今回、唐津における湊の歴史の変遷を調べるにあたり、対象とする時代が多岐に渡ったことから内容によっては皮相的な説明になってしまったことが否めない。この反省点をふまえ、今後ひとつひとつ明らかにしていきたい。

【謝 辞】

本稿の作成にあたっては以下の機関・個人にお世話になりました。記して感謝申し上げます。唐津市教育委員会、唐津市近代図書館、佐賀県立名護屋城博物館、坂井清春氏、立谷聡明氏、都留慎司氏、美浦雄二氏、米倉美和子氏（五十音順）

最後になりましたが、本稿の掲載を快諾してくださった古門雅高氏に深く御礼申し上げます。

【註】

- 註1 みなとは現在、港、湊と表記されるが、本稿では原則、湊で統一する。ただし固有名詞・熟語・慣用句等に付帯する場合はこの限りではない。
- 註2 かっこ内はそれぞれの比定地。
- 註3 「肥前国唐津城廻絵図」（正保年間：1644～1648）国立公文書館蔵。唐津城下を描いた絵図としては最も古いもののひとつ。

- 註4 「肥州唐津城内図」（宝暦年間：1751～1763）唐津市教育委員会蔵。
- 註5 「唐津城下図」（幕末～明治初期）唐津市教育委員会蔵。長谷川雪塘（1836～1890）による幕末から明治初期の唐津の景観を描いたもので、雪塘は唐津藩の御用絵師で、長谷川雪旦の息子雪堤の弟子である。
- 註6 『唐津城図（仮称）』（※個人蔵）には鳥瞰図の構図で船江の描写などが描かれているため、興味のあるかたは、この絵図を紹介・解説した宮崎博司氏の論文をご参照されたい（宮崎 2004）。
- 註7 吉村茂三郎編1974「松浦要略記」『松浦叢書』第二巻、名著出版、97頁。坂井清春氏よりご教示頂いた。
- 註8 安永浩氏によると捕鯨を行う場所は、鯨を捕獲する海上を沖場と呼び、捕獲した鯨を解体する陸上の施設を納屋場と呼んだという（佐賀県立名護屋城博物館 2006・安永 2009）。
- 註9 満島村役場1923『満島村誌』139～140頁

【引用・参考文献】

- 秋山博志 2017「唐津における海軍官署の設置から廃庁まで」『研究紀要』第11号、佐賀大学地域学歴史文化研究センター
- 網野善彦 1992「西海の海民社会」『海と列島文化』第4巻、小学館
- 鮎川和樹 2020「佐志の湊」『島嶼と海の世界』九州の中世Ⅰ、高志書院
- 市村高男 1996「中世後期の津・湊と地域社会」『津・泊・宿』中世都市研究3、新人物往来社
- 市村高男 2016「中世港町の成立と展開－中世都市論の一環として－」『中世港町論の射程』港町の原像：下、岩田書院
- 大庭康時 2019『博多の考古学』高志書院
- 岡崎敬 1982「X 古代末盧の歴史（総括）」『末盧国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版
- 角川日本地名大辞典編纂委員会 1982『角川日本地名大辞典』41 佐賀県、角川書店
- 唐津市教育委員会 1994『徳蔵谷遺跡（1）』唐津市文化調査報告書第57集
- 唐津市教育委員会 1997『千々賀古園遺跡（Ⅱ）』唐津市文化調査報告書第77集
- 唐津市教育委員会 1997『佐志中通遺跡』唐津市文化調査報告書第78集
- 唐津市教育委員会 2002『佐志中通遺跡（2）』唐津市文化調査報告書第104集
- 唐津市教育委員会 2003『徳蔵谷遺跡（4）』唐津市文化調査報告書第110集
- 唐津市教育委員会 2004『徳蔵谷遺跡（5）』唐津市文化調査報告書第117集
- 唐津市教育委員会 2005『佐志中通遺跡（3）』唐津市文化調査報告書第120集
- 唐津市教育委員会 2007『汐入遺跡（2）』唐津市文化調査報告書第135集
- 唐津市教育委員会 2007『荒平遺跡』唐津市文化調査報告書第136集
- 唐津市教育委員会 2018『明治維新百五十年 唐津の明治維新と近代化』
- 唐津市教育委員会 2021『唐津城下町跡1 町田川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査』唐津市文化財調査報告書第185集
- 北波多村史執筆委員会編 2007『北波多村史』資料編、唐津市
- 黒田裕一 2008「松浦・唐津地名考」『西日本文化』No435、西日本文化協会
- 小松讓 2007「2、肥前国松浦郡の交通路と官衙－中原遺跡の解釈をめぐって－」『中原遺跡Ⅰ』佐賀県文化調査報告書第168集
- 坂井清春 2011「唐津城の築城」『北波多村史』通史編Ⅱ、北波多村史執筆委員会
- 坂井清春 2022「唐津城下町のなりたち－唐津に残る町並みのベースはどのようにして造られたか－」令和4年度唐津学講座資料
- 佐賀県立名護屋城博物館 2006『くじらといきる－西海捕鯨の歴史と文化－』
- 佐賀県立名護屋城博物館 2011『海に生きる－江戸時代の唐津のくらしと玄界灘－』
- 佐賀県立名護屋城博物館 2018『肥前名護屋－幻の巨大都市－』
- 酒寄雅志 2014「遣唐使の航路」『栃木史学』28号、國學院大學栃木短期大学史学会
- 佐藤竜馬 2016「前近代の港湾施設」『中世港町論の射程』港町の原像：下、岩田書院
- 柴田亮 2015「考古学的視点から見た肥前西部地域の流通構造」『考古学研究』第62巻第1号（通巻245号）、考古学研究会
- 白水智 1992「二 西の海の武士団・松浦党－青方文書にみる相克の様相－」『東シナ海と西海文化』海と列島文化第4巻、小学館

- 白石溪河 2020「原の辻遺跡の船着き場跡」『土を盛り、石を築く－土木・建築技術にみる東アジア交流－』長崎県埋蔵文化財センター
- 関幸彦 2021『刀伊の入寇 平安時代、最大の対外危機』中公新書2655
- 千田稔 2001『埋もれた港』小学館ライブラリー
- 田島公 1997「真如（高丘）親王一行の「入唐」の旅－「頭陀親王入唐略記」を読む－」『歴史と地理』502号、山川出版社
- 立谷聡明 2021「「鉄」から紐解く唐津の歴史（1）～（3）」『末盧国』第226・228・229号、松浦史談会
- 田中健夫訳注 申叔舟 1991『海東諸国紀 朝鮮人の見た中世の日本と琉球』岩波書店
- 長忠生ほか 1980『佐賀県の地名』日本歴史地名体系第42巻、平凡社
- 常安弘通 1962「第5章 港湾の発達」『唐津市史』唐津市
- 坪内安衛 1999『石炭産業の史的展開』文献出版
- 徳永貞紹 1998「肥前神崎荘園・松浦荘域の中世港湾と貿易陶磁器」『貿易陶磁器研究』No.18、日本貿易陶磁器研究会
- 東定宣昌 1993「唐津海軍炭坑の設定とその経営」『経済学研究』59、九州大学経済学会
- 東定宣昌 1995「唐津炭田の輸送体系の近代化－唐津興業鉄道会社の成立と石炭輸送－」『比較社会文化』第1巻、九州大学学術情報リポジトリ
- 東定宣昌 2002「明治前期、肥前松浦川の石炭輸送」『エネルギー史研究：石炭を中心として』九州大学学術情報リポジトリ
- 久野哲矢 2011「第1章第4節 唐津藩の船手と組織」『北波多村史』通史編Ⅱ、北波多村史執筆委員会
- 福田以久生・村井章介編 2001『改訂松浦党有浦文書』清文堂史料叢書第108刊、清文堂
- 文化庁文化財第二課 2022『水中遺跡ハンドブック』
- 本田美穂 1998「肥前名護屋の中世と近世」『九州史学』第120号、九州史学研究会
- 松浦文化連盟 1981『ふるさとの思い出 写真集 明治 大正 昭和 唐津』国書刊行会
- 松尾秀昭 2020「九州西北岸と五島列島－国内外の文物が行き交う海域－」『島嶼と海の世界』九州の中世Ⅰ、高志書院
- 松下見林 1975『異称日本伝』第二冊、国書刊行会
- 松原弘宣 2004「天平八年の遣新羅使の船旅」『古代国家と瀬戸内海交通』吉川弘文館
- 美浦雄二 2020「松浦郡」『古代肥前国の郡衙と関連遺跡』其の参、肥前国庁跡資料館
- 満島村役場 1923『満島村誌』
- 南出眞助 1998「日本の古代中世における港の空間構成」『アジア文化学科年報』1巻、追手門大学文学部アジア学科
- 宮崎博司 2004「肥前名護屋城図と唐津城図（仮称）について」『研究紀要』第10集、佐賀県立名護屋城博物館
- 宮崎博司 2011「第1章第3節 城下町」『北波多村史』通史編Ⅱ、北波多村史執筆委員会
- 宮島敬一 2006「中世」『伊万里市史』原始・古代・中世編、伊万里市
- 宮武正登 1997「中世唐津の市と港」『都市と宗教』中世都市研究会4、新人物往来社
- 宮武正登 2008「中世港湾「佐志」の実相と構成－地方港湾遺跡の理解に向けて－」『中世港湾都市遺跡の立地・環境に関する日韓比較研究』平成15年度～平成19年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 宮武正登 2017「中世松浦地方の港湾地と領主拠点」『佐賀学Ⅲ』海鳥社
- 村井章介 2014（初出 2000）「四 陶磁器が示す名もない湊と航路」『中世史研究の旅路－戦後歴史学と私』校倉書房
- 安永浩 2009「絵画資料にみる近世西海捕鯨組の納屋場構造」『研究紀要』第15集、佐賀県立名護屋城博物館
- 山口亨 2004「壱岐嶋分寺の造営体制」『福岡大学考古学論集－小田富士雄先生退職記念－』
- 吉村茂三郎編 1974「松浦要略記」『松浦叢書』第二巻、名著出版

【挿図・表出典】

- 図1：「水中遺跡関連図」文化庁文化財第二課2022の21頁より転載。
- 図2：「唐津の湊」佐賀県立名護屋城博物館2011の3頁を参考に筆者作成。
- 図3：松浦郡の湊 ①「松浦郡の範囲」美浦2020の2頁を参考に筆者作成。②「推定古代官道のルートと郡衙関連遺跡」立谷2021の226号16頁より転載、一部改変。

図4：松浦党の湊

- ①「松浦党所領範囲」宮島2006の476頁より転載。
- ②「海東諸国紀」田中1991の384頁より転載。③「図書編」松下1975の710頁より転載。

図5：佐志の湊 ①「佐志の湊遠景（航空写真：南西から）」唐津市教育委員会2007の口絵2より転載、一部改変。

- ②「佐志の湊景観復元図（室町期）」宮武1997・2008・2017を参考に筆者作成。

図6：上場台地の湊 ①～⑤佐賀県立名護屋城博物館2018の38頁より転載、一部改変。

図7：唐津城下の湊

- ①「肥州唐津城内図」部分、一部改変。
- ②「肥前国唐津城廻絵図」部分。 ③「唐津城下図」部分。
- ④「肥州唐津城内図」部分。 ⑤「唐津城下図」部分。

図8：唐津城下の湊2

- ⑥「肥前国唐津城廻絵図」部分。 ⑦「肥州唐津城内図」部分。
- ⑧「空より見たる唐津町」個人蔵・部分。 ⑨「肥前唐津町ノ全景」唐津市蔵・部分。
- ⑩「肥前国唐津城廻絵図」部分。 ⑪「肥州唐津城内図」部分。
- ⑫「肥州唐津城内図」部分。 ⑬「唐津城下図」部分。

図9：島嶼の湊

- ①「小川島平面図」②「小川島納屋場の様子」③「焚場の様子」以上、「小児の弄鯨一件の巻」『肥前州産物図考』国立公文書館データベースより、一部改変。
- ④「小川島納屋場平面構造」安永2009の56頁より転載。

図10：東唐津の湊

- ①「東松浦郡町村図（甲）満島」（明治14年）佐賀県立図書館データベースより、一部改変。
- ②「満島」（大正12年）『満島村誌』1923の4頁より転載。
- ③「米国陸軍撮影空中写真による地形図 満島」（昭和30年）佐賀県立図書館データベースより、一部改変。

図11：西唐津の湊

- ①「東松浦郡町村図（乙）唐津村、妙見浦、大石村」（明治14年）佐賀県立図書館データベースより、一部改変。
- ②「唐津町精図」（大正6年）佐賀県立図書館データベースより、一部改変。
- ③「米国陸軍撮影空中写真による地形図 佐志」（昭和30年）佐賀県立図書館データベースより、一部改変。

図12：松浦川の湊

- ①「唐津石炭用所配置図」秋山2017の5頁より転載。
- ②「岸山村の石炭採掘」『肥前州産物図考』国立公文書館データベースより、一部改変。
- ③「石炭の川下し」唐津市蔵・松浦文化連盟1981の106頁より転載。
- ④「唐津石炭土場位置図」坪内1999の234頁より転載。

図13：町田川の湊

- ①「「ズラシ」検出状況」唐津市教育委員会2021の巻頭図版3より転載、一部改変。
- ②「町田川の川遊び」唐津市蔵・松浦文化連盟1981の119頁より転載。

表1：筆者作成。